

最優秀賞 国土交通大臣賞

水のある風景がなくなつて

宮城県 石巻市立石巻中学校

三年 西牧 奏

ペットボトル二本分の水をもらうのに、五時間。私が生きていくうえでこんなことがあるだなんて、今まで想像したこともなかった。三月十一日の東北地方太平洋沖地震と津波は、私達の石巻を破壊し、たくさんの人の命を奪い、人々を悲しみに追いやった。

今回の震災では、あまりにも突然に「水のない生活」がやってきた。学校で避難生活をしているときは、トイレの水はバケツで池からくんで使い、風呂には十日以上入れず、歯磨きもできなければ、料理も飲食もままならない……。この他にもざっと考えるだけで、手洗い、洗濯など、普段私達が当たり前にとっていた行動が全てできなくなつた。正直、今まで生きてきて、水がない生活など考えようともしなかつた私は急の事態でどうしていいのか分からなくなつた。まさに、なくてはならない、生活の一部を突然なくしたので。このとき私は初めて、自分がどれだけ水と関わり合ってきたか、そして無駄遣いをしていくかを痛感した。思えば、私は、風呂に入るときもシャワーを必要以上に出しているし、手洗いするときも、めんどくさがつて出しっぱなしにすることが多かった。親に注意されても、(このくらい……)とか、(使つてなくなるものではない)などと軽く受け流していた。

しかし、震災後は、水というものをそんな風にしかとらえていなかつた自分がすごく恥ずかしくなつていた。

それからというものの、私は浄水場に行つて水をもらう度に、有効な使い方は何かを必ず考えるようになったし、何よりそこで働いて、私達のために水を用意してくださつてくれる方々に「ありがとう」と声に出して伝えるようになった。そうすること、少しでも水に対しての感謝の気持ちも伝わると思つたからだ。近所のお年寄りの水くみも積極的に手伝い、「ありがとうね。」と言われる度に心が温かくなつた。いつの間にか、水は人と人とのつながりの輪もつくつていたので感じ、うれしい気持ちになつた。

そして、震災から二週間後、蛇口をひねつたら……水が出た。やっとでたという気持ちになるのと同時に、この水と経験を無駄にはできない、守つていかなければならないのだという強い思いが芽生えた。

二週間ぶりにやっと使えるようになったパソコンで調べてみたら、水資源はたくさんあるわけではなく、私達が守つていかなければならない貴重な財産だということを知つた。水辺環境を整えるために、ダムの開発や浄水場でたくさんの人が努力していることも知つた私は、こ

れからは、「世界の水資源」という大きな枠で、有効利用したいと強く感じるようになった。

震災から二ヶ月以上が過ぎた今、今回の経験を思い返すと、水というものは、自分達の生活すべてにおいて欠かせないものであり、必要なものであると心から思う。きれいな水が私一人に届くまで、大勢の人が関わっていることも強く実感した。そして、それはこれからも続いていく。この震災では、街を津波が襲って水の怖さを目の当たりにし、人にとって大切な水、しかし命を奪ったのもまた水、という矛盾のようなものを感じていた私だが、だからこそ、その偉大さが分かったと思っている。水の環境を整備して、いちはやく水を届けてくれた人、少ない水を三人で分け合った友……。人と人をつなぐのも水だった。そう気付かせてくれたことを思えば、私にとって決して悪いことばかりではなかったのだ。

水の重要性がよく分かった今、この二ヶ月間、私を支えてくれた「水」に私は感謝して生きていきたい、もっと深く関わっていききたいと思う。水について考えるため、新たな一歩を今、歩み始めたような気がする。

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

命の源、「水」

徳島県 東みよし町立三好中学校

三年 藤本 春佳

仮想水（バーチャルウォーター）―ある日の新聞記事のなかで出会った言葉だ。節水の本当の意味を理解しようとすることもなく、ただ何となく、まるで流行にのるように節水活動が続けてきた私。そして、私一人の節水が、それほど価値のあることなのかと内心疑いながら、環境保全に協力しているつもりになっていた私。そんな私が、「水」に生かされている自分を強く意識し、「水」についてもつと知りたいたい守りたい、未来について考えた、と強烈に思わせてくれた言葉だ。

それまでの私にとっての水とは、日常生活の中で都合よく関わる、限りなく直接的で視覚的な水、つまり、私の毎日を当たり前のように支えてくれる、私中心の「水」だった。それは、朝起きて飲むコップの水。洗顔や歯磨きのための水。植物の冠水や洗濯のための水。食事づくりのための水。そして、入浴や手洗いに使う水、等々だ。

ところが、仮想水を知ること、私の毎日の生活のなかに、私の目に触れることのない間接的で貴重な水の流れを体中に感じた。それは、世界中のあちこちで生まれた、全生命の源である大切な水。私をここまで育ててくれたと言っても過言ではない。まさに命の水なのだ。私

は、便利で衛生的な生活のため、数々の欲求を満たすために、この貴重な水を大量に、ありえないスピードで、酷使し続けてきたことに気付いたのだ。

仮想水（バーチャルウォーター）とは、農産物や畜産物の生産のために必要とされた水を指す（これらに比べれば、工業生産にかかる仮想水は少量とされる）。例えば、スパゲティ一食分百グラムのためには約二百リットル、とうもろこし一本二百グラムのためには八十リットル、コーヒー一杯十グラムのためには二百リットルという量の水がそれぞれの生産過程で必要とされる。仮想水の考え方に沿えば、私の大好きなハンバーガーの仮想水量は、なんと、牛肉（九百二十七リットル）とパン（七十二リットル）を合わせただけで、九百九十九リットルにもなってしまう。ハンバーガー一個を食べるたびに、日頃手にする五百ミリペットボトル約二千本もの水を私は同時に摂取していたことになるのだ。同様に、カレーライス一皿では約二千二百本、牛丼では三千八百本分、日本茶一杯分ですえ四十本もの仮想水が算出されるといふこの驚愕の数字に、私はただただ茫然と途方に暮れるばかりだ。このように考えれば、食糧の多くを輸入に頼っている我が国は、同時に大量の水を輸入している水輸入

大國だということになるだろう。

仮想水についての学習は、私の、そして、私の家族の「水」に対する意識を根本的に変えた。「水を流しっぱなしで歯磨きしない」「シャワーの水はこまめに止めて」「洗剤は使いすぎないで適量で」――等々、節水生活は我が家での常識となり、何より、どんな少量の食べ物をも残さないよう、捨てないよう、工夫するようになった。目には見えない「水」の息吹を、食卓に並ぶ全ての食べ物から、そして、日常のあらゆる場面から感じとることができるようになったからだ。

我が国は、豊富な水資源と大量の仮想水で生み出された自他国の物資の恩恵を受け、著しい発展を遂げてきた。しかし、仮想水の現状を知るにつれ、不衛生で劣悪な水環境のなかでの生活を強いられ、生命の危険にさらされながら生きていく人々が世界には大勢いるという悲しい事実と、現状が続くことで予想される地球規模での水危機について知った。このような世界状況のなかで私達にできること――それは、水への敬意と感謝の気持ちを持つて生活の無駄を省き、全力で水を守っていかうとすることだ。できることから、私もしっかりと行動していかう。全ての生命の源、大切な「水」を守るために。

優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

日本の食文化を支える水の力

私の母の実家は創業以来七十年以上続く醤油屋です。私の父と母はその醤油屋を継いで昔から変わらない味の醤油を造っています。

以前、父が「おいしい醤油を造るにはおいしい水が必要なんだぞ。」と言っていたのを聞いたことがあります。水が変われば醤油の味が変わるといわれるほど醤油造りには水は重要なのだそうです。

私の住む桜江町には、江の川、八戸川という大きな川が二本流れ、醤油屋はその二本の川に囲まれた自然豊かな所にあります。おいしい醤油を造るためにはこの二本の川が昔からとても大きな役割を果たしていたことが分かります。

醤油は今や日本料理以外のどんな国の料理にも使われる万能調味料ですが、それはどうして日本に広まったのか、水と何か関係があるのか「しょうゆ讃歌」という本で調べてみました。

醤油が日本で、大いに発展した理由は日本という国の気候風土や地理的条件が深く関係しているということだと思います。日本は四方を海に囲まれた島国で、そこには醤油造りに不可欠な塩がいつも隣り合わせであったこと、黒潮

島根県 江津市立桜江中学校

三年 柳光 風香

と親潮が流れる好漁場が沖合にあつて、魚がよく捕れ、また川や池や沼にもあふれるほどに淡水魚がいて、よく捕れ、それらの魚をおいしく食べるには醤油が殊の外よく合ったのだそうです。

気候という点では、醤油造りに必要なこうじ菌が亜熱帯で湿度の多いこの国をすみかにして、大いに活躍してくれたことがあげられます。このことから、日本には海や川などの水が豊富にあったからこそ日本に今の醤油文化が根づいたのだということが分かりました。

小学校三年生の時に桜江町の特産品のごぼうや桑茶について勉強したことがあります。このごぼうや桑茶もまた江の川の水の力がもたらした桜江の産物だということがいえるのではないのでしょうか。戦前から江の川沿いの堆積畑ではごぼうや桑の葉の栽培がさかんに行われていました。江の川は度々氾濫しましたが同時に川が運んできた肥沃な土は自然の滋養をたっぷり含み、付近の土壌へ恵みをもたらしました。

この土地で栽培されたごぼうは風味豊かで歯切れがよいのが特徴で全国のスーパーや百貨店で販売されています。桑の葉は最近では栄養たっぷりのお茶としてその成分が注目され全国的にも有名な桜江の特産品です。ごぼう畑や桑畑は確かに江の川に沿った低い場所に位置し、

川の水が少し増えると水につかるような場所にあります。この場所こそが水の恵みを受けるためには最適な場所だということを知りました。

桜江町内の至る所に広がる水田もまた例外ではないと思います。川で捕れる鮎やツガニなどの川の幸はいつでもぜい沢に食べることができます。

今まで何も気にせず口にしてきたこれらの食べ物ですが、私はこの桜江町の二本の川なしでは育たなかったと思います。昔から川の水がどれだけ私達の食文化を支えてきたか、桜江町の特産品だけみてもそれが分かります。本当に水の偉大さを感じます。

我が家の今日の晩御飯は、桜江ごぼうのささがきを揚げたものにナッツを混ぜ、父の造った大亀醤油と砂糖の甘辛いたれであえた、私も大好きな「ナッツごぼう」です。それに川越の祖母が丹精込めて作ってくれた御飯は何杯でも食べたくなるほどおいしさです。

いつも当たり前のように食べる夕食ですが、今日はいよいよお米や野菜を育ててくれた「水」の有難さを噛み締めながら、そして作ってくれた父や祖母に感謝しながら食べました。いつも以上においしく感じた我が家の晩御飯でした。

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

「水の顔」

神奈川県 葉山町立葉山中学校

二年 猿渡 みなみ

「ポタツポタツ」家の中が静まり返ると、水滴の落ちる音が響く。蛇口をきつく閉めてこなければ……。という思いと逆に、私は何故か心の中でリズムをとるように次の音を待ってしまう。ずっとこの音を聞いていたいとも思う。水の音には、心を落ち着かせる癒しの効果があると聞いたことがあるが、本当なのかもしれない。でも私はその思いを振り切って蛇口をキュツと閉めに行った。私は四年前、社会の授業で神奈川県の水に関する様々なことを学んだ。水源を見学する機会があり、宮ヶ瀬ダムを訪れた。正直行くまでは遠足気分だったが、静かな水面を見て心穏やかになる反面、放流時の激しい水の流れに圧倒されたのを覚えている。首都圏最大のこのダムは中津川の上流にあり、人口増加や産業の発達などによる供給不足の解消や相模原の洪水を防ぐために、昭和四十四年に計画が発表された。しかしダム建設によって、宮ヶ瀬で長い間暮らしてきた村の人々の家が三百戸も水没してしまうことになり、長い交渉の時間が必要とされ、完成までに約三十年の歳月を要したのである。多くの人達の思いと決断があつて、今現在の宮ヶ瀬ダムが神奈川県民にとって欠かせない水源地になっていること

を私達は忘れてはいけないのだ。

またこの水源地を安全に守る為に働く多くの方々の力があつて、私達が安心して水を口にできると言うことも知った。ダムは水道水の貯水の他、洪水調節や河川流量の調節、発電など多くの大切な働きを担っている。当時小学四年生だった私は、ダムの事務所の方に「ダムは水の貯金箱のようなもの」と分かり易く教えてもらい、その言葉がとても心に残っている。あの美しい自然の中の宮ヶ瀬ダムをあとにしてから今まで私は水に対する不安などを全く感じる時はなかった気がする。

ところが皆の暮らしや安全を守る為のダムの水も、時には脅威となつて人々の心に深い爪跡を残してしまうということを私は最近知った――。

毎日ニュースで伝えられる東日本大震災の被害の中に、海から遠く離れた福島県内陸部のダム湖の決壊を伝えるものがあった。農業用のため池として造られたこのダム湖は、温泉やキャンプ場などの観光地としても皆の暮らしに欠かせない、憩いの場として存在していたようである。しかしこの三月、誰も予想することのできなかった大地震によつて、人々の生活を潤す大切な水が反対に人の命や生活全てを奪つてしまった。水が流れ出てしまった湖は干上がり、遊歩道は崩壊し、地割れした湖底が無

残にも浮き上がって見えた。テレビを通して、恐怖を感じると同時に被災された方々の心の痛みがひしひしと感じられ、自分の今まで持っていた水に対する思いが複雑に変化してきてしまいそうだった。けれども考えてみると、私が日々癒されている自然の中で感じる水、水道の蛇口をひねれば出てくる生活の水、その源となっ
ているダムの水も、全て違う「顔」をもった同じ水なのである。それと同時に水は人間が生きていく為には必要不可欠なものであり、何ごとが起ころうとも永遠に共存していかなければならないのである。私はこの災害から目をそらさず、福島の壊れてしまったダムが更に強い「水の貯金箱」として、再び人々の大切な水を預かる場として復活することを願っている。

「ポタツポタツ。」と水滴が落ち、閉まりにくくなっていた我家の水道の蛇口は修理をして、もうあの音は聞こえなくなつた。何故かホツとした。今、このような時だからこそ、私は自分にできることから始めたいと思う。この一滴一滴の水にも、ここにくるまでには長い道のりがあり多くの人々の様々な働きや思いがあるということを考え、これからも水を大切に使うように思う。

優秀賞 国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞

ため池復権く僕たちの挑戦く

香川県 善通寺市立東中学校

三年 高田 知希

僕たちのふるさと香川県は、昔から雨が極端に少なく、「一滴の水は金のごとし」と言われるほど水の獲得に苦勞してきました。約一万七千個のため池が、讃岐の命綱でした。

けれども、近年、ため池の多くは、香川用水通水によって意義を軽視され、手放されたり、埋め立てられたり、家庭ごみを投げこまれてごみ箱同然にされたりするようになってきました。

僕たちボランティア部員は、三年前から、ため池を讃岐の水文化の大切な遺産として、守ろうと取り組んできました。

一九年度の先輩たちは、善通寺市内のおもなため池である「買田池」、「地藏池」、「瓢箪池」、「満賀池」、「吉原大池」や、今では、埋められ消えてしまった「長砂古池」、「朝比奈池」、「四ツ池」に関する史実を、書物や地域の方への聞き取りによって調べて記録し、冊子『善通寺ため池物語』を作成しました。そして市民ギャラリーで、池の美しさに心がゆれた瞬間を写した写真を、史実とともに紹介する『水の里善通寺ため池写真展』を開きました。

こうした活動を通して、先輩たちは、命がけでため池

を築造・改修してきた先人のことや、水を分け合う「番水制」、水を奪い合う「水争い」、「水いくさ」のことなどを知り、一つ一つの池に、忘れてはならない貴重な物語があることに驚いたそうです。

二十年度の先輩たちは、一年を通して、市内のため池の掃除を続けました。とくに、市内でも最も汚れが目立つ「宮池」に通って、堤のごみ拾いと花植えをし、冬には池干し後のへどろに長靴を沈ませながら、散乱した家庭ごみを拾い続けたそうです。その姿は、地域の方の心を動かし、やがて地域一丸となった「宮池」の一斉清掃がおこなわれ、池は、よみがえりました。

そのころ僕たちが入部し、二年間の取り組みを受け継いで、より広い場所で活動することにしました。僕たちが挑戦したのは、県内全域のおもなため池を訪れ、その美しさを写真に撮り、史実とともに紹介する『香川県ため池の四季写真展』を開くことです。

こんなため池の多い香川県ですが、不思議なことに、おもなため池を紹介するガイドマップやパンフレットは、僕の知るところ一冊もありません。ため池自体を観光資源とする「ため池めぐり」という発想もなく、さらに、ため池に関する書物はどれも専門的で難しいものばかり

です。このままでは、一般の人が県内のため池に親しみをもち、水、歴史や文化について知ることが困難です。

そこで僕たちは、自分たちのできる範囲で、県内のおもなため池をめぐる、その美しさを撮影して写真展を開こうと思いました。讃岐平野を「自然美術館」と考え、点在するため池を、「香川の美・アート」として紹介し鑑賞していこうという試みです。僕たちは、二十数人の部員を三、四人のグループに分け、地図と時刻表を見比べながら、ため池めぐりの計画を立てました。そして土曜日や日曜日の朝、早いときには四時には起きて池をめぐる撮影しました。

こうして九ヶ月後、みんなで約二百個の池を訪れた僕たちは、この中から六十八個の池を選んで史実を調べ、昨年の十二月、市立美術館で『香川県ため池の四季写真展』を開きました。たくさんの方が見てくださり、「こんなに美しいため池があることを初めて知りました。」「ため池を守っていききたい。」「水を大切にしたい。」という感想が寄せられました。

水文化について知ろうとすると、ふるさとの歴史や地理や人々の姿が、自然にくっきりと見えてきます。これからも、ため池に関わる取り組みを続け、ふるさとを学び続けたいと思います。

優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞

大切に守り続けたい荒川

東京都 足立区立東綾瀬中学校

三年 小島 啓太郎

僕の休日の楽しみはサイクリングだ。いつも自宅近くの荒川沿いのサイクリングロードを走る。北区の岩淵水門から東京湾へ注ぐ新砂までの約二十キロが定番のコースである。

そこはとても整備されていて、周囲の環境も良く、いつも「楽しくて気持ちいいなあ。」と思いつつながら走っている。

川を下るにしたがって、周りには高層の建物が並ぶようになる。それだけ近くの人口が増えれば、当然生活排水によって、川が汚染されるだろうと思っていた。

しかし、休憩場所でも川の中を覗き込むと、たくさん的小魚が群れをなして泳いでいたり、近くにたくさん鳥や昆虫を見つけたことができる。また、広い運動場なども設置されているし、花壇もきちんと整備されている。

この時僕は、荒川がきれいなことに本当に驚いた。「果たして、荒川の水は本当にきれいなのか」そういう疑問を持った僕は、昨年の夏、荒川の水質を調べてみることにした。具体的には市販の簡易水質検査キットを使って、全長百七十三キロに及ぶ荒川のうち、源流に近い秩父市から河口までのうち合計十か所で水を採取し、水質を調べた。

その結果、源流から約百四十キロの志木市秋ヶ瀬橋までは、ほとんど水質に変化がなく、下流に行くにつれ、多少は川のにごりや臭いがあったものの、水質上はともきれいな川だということがわかったのである。

残念ながら、岩淵水門の辺りから、足立区小台、江戸川区平井あたりは、アンモニウムやリン酸の数値が高かった。しかし調べてみると、いずれも問題のある数値ではないことがわかった。

この結果に、僕はあらためて驚いた。これだけ流域に多くの人口を抱えているのに、素晴らしい水質を保ち、僕たち都民の憩いの場所となっていると同時に、動植物にも住みよい環境を作ってくれている荒川に、本当に「ありがとう」という気持ちになった。でもこれは決して荒川が自分の力だけで水質を守っているのではないと思う。上流地域の人たちが川を汚さないように気をつけて下さるおかげで、下流の僕たちの所まできれいなまま東京湾に出ていけるよう気をつけていかねばならないと思う。

母は「最近、使用後の食用油を排水口に流さないのは常識になつてると思うよ。」と言った。祖母は「すすぎが

一回ですむ洗剤ができたから、水の節約にもなるし、排水も減らせるね。」と言った。

生活の工夫や進化が、川の汚れを食い止めてくれるのかもしれない。けれども、それに加えて僕たち一人一人が、川を汚さないという意識をもつことが大切だと思う。

たった一人のたった一つのゴミかもしれない。しかしそれらが積み重なると、とても大きな汚れになることを忘れてはいけないと思った。

とても寒かった冬が過ぎ、今はまた絶好のサイクリング日和が続いている。

僕はまた今週末も荒川沿いを走る。

走りながら「楽しくて気持ちがいいなあ」と思うのは以前と変わりはない。しかし今は「ありがとう」と「大切にしていきたい」という気持ちたちが新たに加わっている。